

# 和田竜『村上海賊の娘』論

## 成立過程と人物造型をめぐって

原 卓 史

### 一 はじめに

和田竜「村上海賊の娘」は、『小説新潮』に二〇一一（平成二三）年五月五・一二日合併号から二〇一三（平成二五）年三月七日号にかけて発表された。単行本『村上海賊の娘』上下巻（新潮社二〇一三〔平成二五〕年一〇月）と、文庫本『村上海賊の娘』全四巻（新潮社〔新潮文庫〕二〇一六〔平成二八〕年七・八月）が刊行された。

その後、『村上海賊の娘』は、本屋大賞を受賞して多くの読者を獲得したことによって、作品が広く知られることとなった。二〇〇万部以上の単行本売り上げを記録するなど、大きな話題を提供してきた。また、和田竜自身、対談（注一）、自作解説（注二）、

講演会（注三）などを通して、繰り返し『村上海賊の娘』について言及を行い、積極的に発信を行っている。さらに、マンガ（注四）が現在も連載中であるなど、メディア・ミックスが起きている。

『村上海賊の娘』に対して反響が巻き起こっている一方で、研究面での反応は芳しくはない。たとえば、細谷正充「今年の収穫―各種ベスト1」、『朝日新聞』二〇一四〔平成二六〕年二月二六日）は、当該作品の魅力について、三点指摘をしている。一つ目は、「ヒロインの魅力」である。「悍婦」で「醜女」だが、「戦火の中に果敢に飛び込んでいく景が、たまらなく素敵」なのだという。二つ目は、「ストーリー」が「オーソドックス」であること。「現実打ちのめされ、心」を折ってしまった景が、「そこ

から立ち直り、木津川合戦の激闘に身を投じる」とことだとする。三つ目は、「重厚な筆致で綴られて、いつ果てるとも知れぬ戦闘描写」だとする。

また、呉座勇一「最強の『あまちゃん』海賊―和田竜『村上海賊の娘』（上巻・下巻）」（『波』二〇一三（平成二五）年一月）は、「世間知らずのおてんば姫が、戦争の過酷な実態を目の当たりにしてなお、武士の「常識」を蹴飛ばして己の「正義」を命がけて実現しようとする。その無謀な挑戦に海千山千の猛者たちが、敵味方問わず巻き込まれていく」ところに「『真実』のドラマ」があるという。そして、「親しみやすい文体とは裏腹に、本作はまぎれもなく本格歴史小説」なのだ指摘している。これらのエッセイの共通点は、ヒロイン村上景の魅力を語っているところに共通点を見出すことができるだろう。

しかし、村上景の人物像型がどのように行われてきたのかについては、十分に検討されてきたとはいえない。そこで本稿では、まず『村上海賊の娘』の作品の成立過程を明らかにすることからはじめたい。どのような資料に依拠して作品は成立したのかを明らかにしよう。次に、主人公の人物造型の分析

をしていきたい。こうした分析を通して、当該作品の独自性を浮き彫りにしていく。展望としては、村上海賊を描いた歴史・時代小説の中に位置付けていくことを考えている。従来の作品との共通点・相違点を明らかにするため、他の作家の他の作品についても検討の対象とする。

## 二 資料の使用方法

初刊本の和田竜『村上海賊の娘』下巻の巻末には、「主要参考文献」が四頁にわたって付されている。作品を通読してみると、この「主要参考文献」に掲出されていない資料もいくつか散見できる（注五）ため、多くの資料が使用されて作品が成立していることが窺えよう。和田竜自身も、子供の頃に読んだ司馬遼太郎作品の参考文献を見て、こんなに多くの資料を使って小説は作られるのかと思ったと発言している（注六）。司馬遼太郎の作品などの影響を受け、多くの資料を用いて作品を執筆しているのだといえるだろう。

これらの資料はすべて重要ではあるが、軽重がなわけではない。それでは、これらの資料のなかで

どれが重要なのだろうか。本稿では二つの資料に注目してみたい。ひとつは、『萩藩譜録』である。「主要参考文献」欄の前から三つ目に「萩藩譜録」（山口県文書館）」と記されているものである。なぜ大事なのかは、作中の次のくだりを読むと分かるだろう。

実は現在、武吉に実の娘がいたとする記録はひとつしかない。『北畠正統系図』などの能島村上の家系図ではこの娘の名は欠落しており、わずかに『萩藩譜録』に記されているのみである。  
(上61)

この世に村上武吉に娘がいたという根拠を示す一文である。この『萩藩譜録』の記録がなければ、村上景という人物は誕生しなかったと言っても過言ではない。それゆえ、重要な記録なのである。この資料名は、正確には『萩藩譜録』所収「村上図書元敬寄組」で、記述されているように山口県文書館蔵の資料である（資料一、資料二）。



資料一



資料二

資料一には、村上武吉、村上元吉の名前を確認することができる。資料二には、村上武吉の子供の欄に、女、村上景親、女の順で記されていることが分かる。景親の左側の女が村上景のモデルとなった人物である。では、和田竜はなぜこの資料に行き当たることができたのだろうか。

それは、和田竜が山内譲『瀬戸内の海賊―村上武吉の戦い』（新潮社 二〇〇五〔平成一七〕年一月）を参照したからである（主要参考文献に掲出されている）。当該書の中で、山内譲は資料一、資料二の『萩藩譜録』を参照したと記した上で、独自に作成した村上武吉の周辺の人物関係図を掲げた。それを見ると、たしかに村上武吉にはひとりの娘がいることが窺える。では、和田竜が参照したと言い切れるのかというと、増補改訂版が刊行され、そこに和田竜が当該書を参照したと記しているからである。山内譲『増補改訂版』瀬戸内の海賊―村上武吉の戦い』（新潮社 二〇一五〔平成二七〕年一〇月）が出版されたとき、その帯文に和田竜が文章を寄せている。そこには、「この本に出会わなかったら『村上海賊の娘』は誕生しませんでした」と記されているのである。また、この増補改訂版には、山内譲と和田竜による「特別対談 村上海賊と歴史の現場」が掲げられている。その中で、次のような発言があることに注目してみよう。

和田 そうなんです。村上武吉の史料には、養女の存在はしばしば書かれているのですが、実

の娘は全く出てこない。ただ、その中で唯一、山内先生の『瀬戸内の海賊』にだけ「女」の表記で実の娘の存在が紹介されていたんです。（65ページ参照）。

山内 当時の武将の家系図においては、時々女性の存在が省かれることがあるんですが、武吉の実の娘については『萩藩譜録』の中から見出しました。ただ私自身、娘の存在自体は特別に意識してはおらず、ただ黒川元康という人物の妻になったことは記してあったから黒川とは何者かということとは調べました。が、こちらは、はつきり分からなかった。

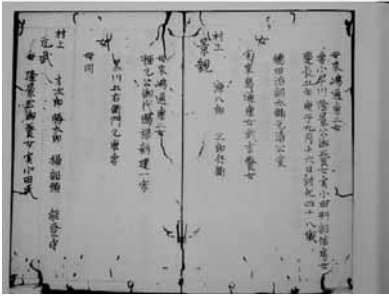
和田竜は、女性を主人公にした小説を書きたいと思っていたようである。記録を調べていたら山内譲が村上武吉に実の娘がいたことを指摘していることに気付いたと発言している。一方の山内譲は武吉の娘にはほとんど注目していない。小説家と歴史学者の注目ポイントの差が如実に出ている対談で、とても興味深い。歴史学者は事実を積み上げていくのに対して、小説家はあり得たかもしれない真実を想像（創造）していく。たったひとつの記録から、村上

景という人物の見た目、性格、対人関係などのひととなりや和田竜は作り上げていったことになる。村上景の誕生の秘密は、『萩藩譜録』を閲覧し武吉に娘がいることを指摘した山内譲の著書と、それを読んだ和田竜にあったといっている。

ただし、ここでもう少し付け加えなければならぬことがある。山口県文書館には、『村上家系 付大島郡村上』という資料も所蔵している(資料三、資料四)。



資料三



資料四

この資料で注目すべきことは、村上武吉の人間関係に関する限り、先ほど参照した資料一、資料二と記述内容が同じであることである。資料三には、村上武吉と村上元吉の名前を確認することができる。資料四には、村上景親の名前があり、その両隣に「女」という文字が見える。景親の右側の「女」は、「穂田治部太輔元清公室／実来島通康女武吉養女」とある。こちらは武吉の養女であることが分かる。問題は、景親の左側に書かれた「女」である。「黒川五右衛門元康妻／母同」と記されている。母親が景親と同じであることを示した記述である。先ほど、山内譲が「黒川元康」について調べたと語っていることを紹介したが、その人物がここに示されているのではないだろうか。

以上のことから、たしかに村上武吉には娘がいることが確認できたといえるだろう。しかし、それは和田竜が指摘したように、たった一つの資料しかなかったということではない。『萩藩譜録』所収「村上図書元敬 寄組」とともに、『村上家系 付大島郡村上』という資料もあつたのである。また、その娘は村上景親の姉ではなく、妹として記録されているということである。『村上海賊の娘』では、村上

景親の姉として登場してきているので、その辺りが資料の記述とは異なっているということになるだろう。

先ほど、『村上海賊の娘』にとつて、重要な資料が二つあると指摘した。もうひとつの資料は「能島家伝」である（注七）。この「能島家伝」を踏まえた箇所を確認してみよう。

—軍船に女を乗る事堅く可禁。／能島村上家に  
伝わる軍書『能島家傳』の一文である。／同書  
は、船戦の戦法や戦場での心得について記した  
もので、元吉はその信奉者であった。村上海賊  
に伝わる軍書はいくつかあるが、元吉はすべて  
を読破していた。／女を軍船に乗せてはならな  
い、という掟は村上海賊のいずれの軍書にも必  
ずといつていいほど記されている。元吉がこれ  
を蔑ろにするはずがなく、景が兄から逃げ回り、  
吉継に対して弱腰になったのもこのせいであつ  
た。（上116）

「能島家伝」に記された「—軍船に女を乗る事堅く可禁」を、『村上海賊の娘』は踏まえている。そ

して、「女を軍船に乗せてはならない」と現代語訳している。この掟は「いずれの軍書にも必ずといつていいほど記されている」というように、「能島家伝」以外の軍書にも記されている（注八）。これが村上海賊にとつて、重要な掟だったからこそ、他の軍書にも記されたのである。現在では女性が舟に乗つてはいけないという科学的な根拠を指し示すことは難しい。一方、戦国時代にあつては、このような「掟」は、社会の秩序を安定させる役割を果たしていたのだろう。「掟」を守ることによつて、村上海賊を統率することができていたといえる。

しかし、「掟」とは破られるためにあるものなのかもしれない。禁じられたことを破ることをする人間がいるからこそ、ドラマが生まれるのではないだろうか。村上景が「掟」を守るような人物であれば、そもそもこの作品は成立しない。掟を破るようなタイプの女性だからこそ、ドラマになるのだろう。

先ほど、「能島家伝」は重要な資料の一つだと指摘したが、それはなぜなのだろうか。「能島家伝」に書かれた「軍船に女を乗る事堅く可禁」は、実は表向きの言葉に過ぎない。この資料には、裏側の意味が含まれている。先述したように、村上海賊関係

資料では女性を軍船に乗せることは禁じられていた。それゆえ、女性を軍船に乗せて戦をすることなど、資料を見ている限りでは想定することができない。それにも関わらず、『村上海賊の娘』は女性を軍船に乗せて戦に出るということを描き出す。

実は資料には「軍船に女を乗る事堅く可禁」と記されていたが、船に乗って戦をした人物が村上景の前にもいたのである。鶴姫である。景が舟に乗って海賊働きをするようになるのは、鶴姫の影響を受けているからだ。このことについて、もう少し見ていこう。

天文十年のこの時期、四十四歳で存命中の毛利元就は、大内義隆に臣従している。十年後の天文二十年（一五五一年）、同じく大内家の重臣だった陶晴賢が義隆を弑したため、元就は、これまで何度か触れた厳島合戦を起こし、晴賢を討ち取るに至るのである。／「三島神社は、三島水軍つてもものを持っていてな」／景は話を続けていく。／伝説では、三島水軍の将の一人に、越智安成おちやすなりという男がいて、鶴姫と想いを通じ合っていた。／「鶴姫はこの男とともに船戦

に出て、数度にわたって大内家の水軍を追い払ったということだ」／しかし、何度目かの船戦の際、安成は討ち死にしてみよう。鶴姫は死を賭して大内水軍に最後の突撃を図り、敵を撃退したのち安成を追って入水し、自死した。（上 194～195）

鶴姫と同じように好いた男と船戦をともにしたい、それが村上景の望みなのである。女性を軍船に乗せてはならないと軍書に書かれているにも関わらず、なぜ鶴姫が軍船に乗ることができたのか、その理由をこのときの村上景は知らない。それがまさしく、裏側の意味である。ここでいう裏側の意味とは、作中に登場する「鬼手」である。『村上海賊の娘』の中で、「鬼手」について次のように記されている。

「吉継叔父つ」／元吉は憤激のまま問うた。／「鬼手とは景の奴を兵船に乗せ、戦させることじゃな」／「知っていたのか」／吉継は舌打ちした。元吉は頭を振って、／「いや、景親が見抜いた」／「あいつがか」／吉継は口髭を歪めてふつと笑った。／「いかにも。女子を兵船に

乗せる。これが鬼手の秘策よ」／そう明かした。  
(下253)

上巻の165ページに初めて使われた「鬼手」という言葉の意味は、下巻の253ページまで語られることはない。まるでミステリーのように、「鬼手」という言葉は作品の中で機能していく。この場面ではじめて、「鬼手」とは女を軍船に乗せて戦をすることだということが明らかにされる。この「鬼手」がとても重要なのは、軍書に書かれていない言葉であり、書くことのできなかつた言葉だからである。多くの兵士たちを死に迫いやる戦法だからだ。重要であるにも関わらず、書くことのできない／書いてはいけない言葉。それが「鬼手」なのである。資料に書かれていないにも関わらず、あり得たかもしれない「鬼手」という方法を生み出したところに、『村上海賊の娘』の優れた資料の使用法があるといえよう。〈口伝〉として三島村上の当主にのみ伝えられてきたという設定を行っているからである。このように、『村上海賊の娘』は資料に書かれていないということをもって、「鬼手」を〈口伝〉として伝わったものという描き方をしたのであ

る。では、その「鬼手」を繰り出す存在となるヒロインの村上景はどのようにえがかれているのだろうか。次節でそのことについて、検討してみよう。

### 三 村上景の魅力

景の魅力はなんといっても、小説のヒロインらしからぬ人物造型にあるといっていいたいだろう。この人物の魅力について、見た目、性格、対人関係、以上三つの観点から説明していきたい。

まず、見た目について考えていこう。村上景の見た目は一言でいうなら、「醜女」である。「容貌の醜い女」、これが日本で最も権威のある辞書『日本国語大辞典』第二版(小学館 デジタル版 引用は二〇一六〔平成二八〕年一月一日)の記述だ。「醜女」の主人公という設定は、独特といっていいたいだろう。小説のヒロインは、たいてい美人で性格がいいと相場が決まっている。しかし、この作品に登場する主人公は美人ではない。それが『村上海賊の娘』では、とても魅力あるものとして設定されているところが興味深いところだろう。「醜女」という言葉は、少なくとも二七回、使用されている(注九)。『村上



海賊の娘』の中で、はじめて景が「醜女」であるとされるのは、海賊働きをする景を目の当たりにした児玉就英が、不快感を募らせる場面である。

「意気地なしめ」／景はどんどん小さくなっていく就英の姿につぶやいた。嫁入りを望む男に発する言葉ではないが、傍らの景親だけは、姉が依然この就英への興入れを狙っているのを知っていた。／一方の就英は、正反対の想いで景の姿を凝視している。／（何という醜女、何という悍婦か）／離れゆく景の姿を望みつつ、不快感を募らせていた。（上96）

児玉就英が景を見て「醜女」だと思ふ場面である。景を醜女だと思ふのは、就英だけではない。三島村上の海賊たちも皆そのように思っている。毛利家の者たちもそのような噂を耳にしている。安芸の一向宗の門徒である留吉は、子供だけに容赦がない。景に対してはつきりと次のように言ってしまう。

「帰れつ。人殺しの海賊づれが、畏れ多くも阿弥陀様にいちやもんを付ける気か。帰れ、その

醜女面をぶら下げてきつさと瀬戸内に帰れ」／土塁にいる門徒は留吉の言葉にどつと沸いた。（下43）

景に対して悪口雑言を浴びせる留吉は、この後、自己嫌悪に陥ってしまう。

景を醜女だとみなすのは、彼らだけではない。織田信長の家臣太田兵馬も、泉州の触頭沼間任世・義清父子も、景に対する評価は同様である。景のことを可愛いと思っていた父村上武吉でさえ、周囲の景に対する評価に娘が「悍婦」で「醜女」であることを認めないわけにはいかない。

謙信出陣の報があるまで動きたくない隆景には、武吉の引き延ばしは歓迎すべきものだったはずだ。／「案ずるな。これで小早川隆景の賢しらはもとより、宗勝の奴も満足のはずじや」／武吉がそう言ったのは、このことだった。その後、自分と吉充が出陣を催促したこともあつてか武吉は賀儀城に船団を送り、ここ岩屋にも軍船を遣るはめにもなったが、ここまで引き延ばせば隆景も恩に着る。悍婦で醜女の景の輿入

れのため助力を惜しまないはずだ。(下162)

これは武吉の側から語られた文章である。その中でも景に対して、「醜女」が使われるのである。このように、三島村上家、毛利家、織田家、一向宗門徒など、多くの者たちが村上景を「醜女」と見なすのである。ところが、それが難波海に行つてみると、美人で「面白い奴」としての扱いを受ける。たとえは、次の場面を見てみよう。

(なんだよ)／と、目鼻立ちまでくつきりとわかる眞鍋の兵たちを見渡したとき、この女の待ちに待った瞬間がついに訪れた。／「皆、見てみい。さすがは姫さんや、えつらい別嬪さんやで」／「眞鍋の兵の一人が、感極まったように叫んだ。他の兵も一斉に、／「おいよ！」／と賛同の叫びで応じた。(上223〜4)

眞鍋海賊たちが村上景とはじめて出会う場面である。景の美しさに海賊たちは感嘆の声を上げる。地域によってこれほど美醜の評価が変わるということを設定したこともまた、珍しいことではあるまいか。

後に、泉州の海賊たちは、南蛮人、今でいう西洋人を見慣れており、彫の深い女性を美しいと思う感性を持っていたことが明らかとなる。このように、見た目がまず「醜女」とされ、そして地域によってはそれが美しく見えるという設定の主人公こそ、この小説の一つの魅力になつていたのである。

次に、性格についても考えていこう。能島村上の三兄弟の中で、村上武吉の勇敢さや荒々しさを最も受け継いでいるのは景である。景は海賊働きをして、自ら乗っ取りをかける人物であるため、たしかにその一面を受け継いでいるといえるだろう。

しかし、武吉の深い洞察力や、他人に心を読み取らせない表情など、景は受け継いでいない。思慮の浅さが見受けられるのだが、そうであればこそ、児玉就英に「(何という醜女、何という悍婦か)」と、思われてしまひもするのである。ここで注目したいのは、「悍婦」である。「悍婦」とは、『日本国語大辞典』第二版(前掲)によれば、「氣のあらひ女。じゃじゃ馬。」といった意味である。この言葉も、「醜女」程ではないものの、少なくとも一〇回、作品の中で使われている(注一〇)。景の「悍婦」ぶりについても、武吉も含めた三島村上の海賊たち、毛利家の

人々がそう受け止めている。

児玉就英は、景と結婚する条件として二度と軍船に乗らないことという条件を出す。景はあっさりとその約束を破ってしまう。作品の最後まで、景はじゃじゃ馬であり続ける。それゆえ、留吉からは、結婚はできないな、と言われてしまうのである。このように、じゃじゃ馬ぶり、すなわち「悍婦」については一貫している景ではあるが、他人との関わりを通して、大きく人となりが変わっていく（成長していく）ところもある。

最後に、対人関係についての話に移っていきこう。その変化は、とりわけ眞鍋七五三兵衛との出会いによるところが大きい。そのことについて、見ていきたいと思う。七五三兵衛はじめとする泉州の武士たちが大事にしていたのは、「俳味」や「面白い奴」であった。それは次のように記されている。

泉州の侍どもが姉をこうまで褒めそやすのは、顔の造作ばかりが理由ではない。姉の性格までもが、その好みと合致しているのだ。この荒武者どもは、女にも激しさを求めている。／こういう所、乱世の先進地であり、遠く東南アジア

まで商船を発した堺の豪商と身近に接している泉州侍らしい好みであった。女はあくまで能動的で、男を手こずらせるぐらいの方が面白い。

(上315)

弟の景親の側から見た泉州の侍たちの姿が描かれる場面である。出会った初めのころ、泉州の侍たちにとって、村上景はまちがいがなく「面白い奴」であった。泉州の侍たちにとって、見た目が別嬪であるということだけが好みなのではない。景の勇猛さや荒々しさが好みにも合致していたのである。だから、大坂で景はとももてたのだろう。見た目や性格の好みは地域によつて、変わるものだということを示している。

しかし、地域によらず変わらないこともあった。それは対人関係である。とりわけ、家を守るという意識、作品の中では繰り返し「自家の存続」として語られることが重要視されていた。三島村上も、毛利家も、泉州の侍も、織田家も、眞鍋家も、いずれも「自家の存続」のために戦っていた。こうした中であつて、「自家の存続」の大切さを知りつつ、そのような振る舞いに嫌気が差していたのは、村上武

吉である。村上景もまた、「自家の存続」とは異なる規範で動こうとする人物であった。見た目も、性格も、そして対人関係も、徹底して村上景という人物は、他人と異なっている。では、その行動原理とほどのようなものなのだろうか。武吉と景の会話を確認しよう。

「誰も彼もが自分のためだ。七五三兵衛も、雑賀の孫市もそうだった。兄上もそうだ。皆、自分のためにしか戦ってはおらんのだ。」／「戦や武家とはそういうものだ。自らに利がなければ戦う者などおらぬ」／「オレが馬鹿だった。難波に行つてそのことがよく分かった。でもな父上」／景はきつと顔を上げた。／「留吉は違う。源爺も違った。門徒の奴らだけは違うんだ。あいつらだけは他人のために戦おうとしているんだ」(中略)／「戦に出るに値しなかるうが、たとえ門徒どもに撥ね付けられようが、オレはあいつらのために戦うんだ」(下174)

大坂から一旦能島に戻つて来た景が、再び大坂へ行く決意をする場面である。戦を華麗なものとして

しか思つていなかった景が、目の前で源爺が殺されるなど戦さの現実を知り、何のために戦うのかという哲学を構築する瞬間といつてもいいだろう。ここでの景の行動原理は、他人とは大きく異なっている。周囲は「自家の存続」のために戦うのに対して、景は留吉らのため、つまり他者のために戦うのである。こうした考えは甘いと受け取られる時代であったかもしれない。しかし、自分なりの戦に対する価値観を構築することによつて、景の成長を確認できる場面でもあるのだ。

以上のように、村上景は、見た目、性格、対人関係など、全ての面で他人とは異なっている人物として造型されていることを確認してきた。いわば、この時代らしくない人物として描かれていると言いつてもいいだろう。それが、景の魅力として多くの読者に受け入れられたのではないだろうか。

#### 四 まとめ

ここまで、和田竜『村上海賊の娘』についての考察を行ってきた。まず、二つの典拠について注目をした。『萩藩譜録』所収「村上図書元敬 寄組」が

村上景のモデルとなった人物が掲出されている資料である点で、当該資料の重要性を明らかにした。しかし、この資料だけが景のモデルを指し示す資料となっていたわけではない。『村上家系 付大島郡村上』にも村上景のモデルとなった人物が掲出されており、この資料も『萩藩譜録』に劣らず重要な資料であることを示した。「能島家伝」「能島家伝書」は、軍船に女性を乗せてはならないという記述をした資料として注目した。これらの資料が重要なのは、軍船に女性を乗せて戦をする方法を資料に書かずに、三島村上の当主にのみ伝わる（口伝）として描いたからである。

次に、これらの資料を踏まえて造型された村上景についての考察を行った。見た目、性格、対人関係に注目し、既存の歴史・時代小説にはない独自のヒロイン像を提出したところに、『村上海賊の娘』の魅力があったことを明らかにした。「醜女」と呼ばれるヒロインが、地域によつては美人として見なされていくこと、「悍婦」のヒロインが眞鍋七五三兵衛との出会いを通して成長していくことなど、作中の人物像の変化を明らかにした。

村上海賊を描いた作品は、これまでも描かれて

きた。代表的なものとして、城山三郎『秀吉と武吉』（朝日新聞社 一九八六〔昭和六一〕年一月）、白石一郎『海狼伝』（文藝春秋 一九八七〔昭和六二年二月〕）などを挙げることができる。これらの作品は、村上景のようなヒロインが主人公となるような描かれ方ではない。村上武吉や笛太郎といった男性の主人公であった。それに対して、和田竜『村上海賊の娘』は、女性を主人公に据えた作品なのである。その点で、新たな村上海賊の小説が誕生したといえるのではあるまいか。

#### 【注】

（注一）和田竜・ロバートキャンベル「対談」スポーツのように戦った村上海賊」（『小説新潮』二〇一三〔平成二五〕年一月七日）、和田竜・綾瀬はるか「対談」中学校の「同窓生」！ ローカル対談 本屋大賞『村上海賊の娘』100万部突破記念！（『週刊新潮』二〇一四〔平成二六〕年五月二九日）、和田竜「インタビュー」瀬戸内×作家」（『メディアパルムック 旅×瀬戸内』二〇一四〔平成二六〕年一一月）など。

(注二) 初出誌『小説新潮』の連載に先立って、和田竜は自作の解説を行っている。和田竜「村上海賊の娘」『小説新潮』二〇一一年四月(平成二三年) 二八日)によれば、「戦国時代、瀬戸内海の芸予諸島に蟠踞する海賊がいた。村上海賊がそれだ」とし、

三島村上のなかの最大のものが能島村上家でその当主が村上武吉だったとする。そして、『萩藩譜録』によると、武吉には実の娘がいたとあり、それがこの小説の主人公、村上景、二十歳である。／小説では、この荒くれ者の独身女で、ある村上海賊の娘を通して、史上、木津川合戦と呼ばれる海戦を描く」と記す。その他、和田竜「(インタビュー) 四年をこの一作にかけた」『波』二〇一三年(平成二五年) 年一月) などがある。

(注三) 「村上水軍シンポジウム 和田竜先生と語る! もし『村上海賊の娘』の続編を書くならば」(愛媛県今治市大島・石文化伝承館 二〇一五年(平成二七年) 年七月)、「日本遺産シンポジウム 村上海賊の魅力の世界へ」(愛媛県今治市大三島・今治市上浦歴史民俗資料館 二〇一六年(平成二八年) 年一月) など。

(注四) 和田竜原作・吉田史朗漫画「村上海賊の娘」

『週刊ビッグコミックスピリッツ』二〇一五年(平成二七年) 年八月一〇日)。その後、和田竜原作・吉田史朗漫画の単行本『村上海賊の娘』(小学館 二〇一六年(平成二八年) 年二月)、現在第五巻まで発売)として刊行中である。

(注五) 「主要参考文献」には掲げられていないが、作中に登場する文献として、「源平盛衰記」、「歎異抄」、「日本書紀」、「日欧比較文化」、「平家物語」、「万葉集」などが挙げられる。

(注六) 和田竜・杏・春日太一「(鼎談) 読んでも観ても面白い司馬作品」『オール読物』二〇一六年(平成二八年) 年二月)

(注七) 『村上海賊の娘』の中では、「能嶋家傳」と「能島家伝」の表記の混用が見られる。本稿では便宜上、「能島家伝」に統一して表記することとする。なお、当該資料は、『海事史料叢書』第一二巻(巖松堂書店 一九三〇年(昭和五年) 年八月) ↓ 成山堂書店 一九六九年(昭和四四年) 年一〇月) に収録されている。引用は、成山堂書店版による。

(注八) 『海事史料叢書』第一二巻(前掲) 所収「能島家伝書」には、「一軍船に女を乗する事堅可禁」と記されている。

(注九) 初出誌『小説新潮』では、初刊本よりも多く「醜女」が使われている。本文を改訂するにあたって、初刊本では削除されたものと思われる。本稿では改稿の問題はほとんど扱っていないが、初刊本収録時に初出誌の記述を大幅に書き改めていることを指摘しておく。

(注一〇) 初出誌『小説新潮』では、「醜女」と同様、「悍婦」は多く使われている。本文を改訂するにあたって、初刊本では削除されたものと思われる。

### 【附記】

本稿は、因島図書館講演会「和田竜『村上海賊の娘』の魅力」(於因島図書館 二〇一六年二月二十八日)、尾道文学談話会「和田竜『村上海賊の娘』の魅力」(於MOU尾道市立大学美術館 二〇一六年八月八日)、今治市議会・尾道市議会議員姉妹都市合同研修会講演会「和田竜『村上海賊の娘』の魅力」(於因島ホテル 二〇一六年一〇月二十八日)に基づく。会場内外より貴重なご意見・ご教示を賜った方々にお礼申し上げます。

—はら・たかし 日本文学科准教授—